

5月号 (No. 263)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

ギド・レイ旧蔵名山図会后日譚

……………日高信六郎……………	1
訂正旁ター筆……………藤島敏男……………	1
故高木菊三郎氏を憶う……………山崎安治……………	2
寒波様々・氷の竜神峽と袋田の滝……………笠井 篤……………	2
山男とパイプ……………永原輝雄……………	2
夏山診療所報告……………長尾悌夫……………	3
北海道大学バタゴニア学術調査隊 (1965～1966)……………安間 荘……………	3
会員通信……………	4～5
冠松次郎，津田周二，藤田博， 青木敏，岡部紀正，早大山岳部 南アルプス南部登山道の一部通行禁止……………	5
食べられますか……………I.Y……………	5
図書紹介……………	6～7
「森林・草原・氷河」「カナリヤの本」 「高山簡記」「飛驒の年輪」「アフガニ スタンの山旅」「Edelweiss, No. 30」	
内外情報……………	8
東京支部創立 20 周年記念山行 Karakorum-H.K学術探検公式報告書 レンキーク氏歓迎会・外人登山家の来日	
会務報告……………	9
主な海外登山 (1967) - III……………	10
会員異動……………	10～11
世界の山岳の地図と本即売展……………	11

ギド・レイ旧蔵
名山図会后日譚

日高信六郎

昨年十一月の会報二五七号で報告したギド・レイ旧蔵の日本名山図会に関するイタリア山岳会ベルトリオ氏宛の手紙に対して、大意つぎのような返事が昨年末にとどいた。

『お手紙と谷文晁の本三冊たしかに受取りました。あなたは返事がおくれた申しわけを云っておら

れるが、私の厄介な質問についての解答に時がかかるのは当然でしょう。私も御説明や本をゆっくり調べたのでその手紙がおくられた次第です。三冊の立派な本を下されたことにつきあなと足立源一郎氏の御厚意に感謝いたします。この本はわれわれには貴重なもので早速会に引渡しました。あなたの説明は大へん詳しくわれわれの様な日本語がわからないものにはこの本の意義を知るに大いに役立ち

ますので、本といっしょに保存します。

私は本会所蔵の二冊がどうしてギド・レイの手に入ったか調べましたが成功しませんでした。かれの親類はだれもその由来を知らず、友人はみな死に絶えました。しかし私はレイが度々ロンドンに行った折りにいつかこの本を買うか、だれかから貰うかしたものだと思います。(ついでながら日本山岳会の図書室にはレイの本が備えてありますか?)

あなたの説明を読んで、さらに別の好奇心が起りました。これは「マライニの『日本滞在記』」にも解説してありません。それは「川村」も谷も日本中ずい分多くの地方を旅行したのに違いないが、その頃日本ではどんな風にして旅行をしたのでしょうかか安易であったか、困難であったか？ 陸行か海路か？ 車か又はせまい路を馬か徒歩で行ったのか？ 長い旅をするのにどの位の日数を費したか？」ごらんの

の通り、私は一つの質問に満足な説明を受けるとそれからさらに山の質問をして、説明者をなやます悪いくせがあるのです。

最後にイタリア山岳会に本を寄贈された足立さんと山名のリストを作って下さった小林さんにわれわれの謝意をお伝え下さい。』

足立、小林両会員には早速お知らせしましたが、どうも厄介なことになってしまった。わたくしはベルトリオ氏から頼まれた二人の在トリノ留学生と同じような眼に

あわされる破目になったのである。日本山岳会の名譽のために、どなたか博識の方に伺って然るべき返事を出さねばなるまい。御氣付きのかたの御指導御援助をお願いいたします。

◇訂正旁々一筆◇

藤島敏男

会報二六〇号十二頁二段目に、私のことが出ている。昨一九六六年中の山行回数と登ったメートル

についての記事であるが、少々訂正を要する。

まず回数^①は十三回でだいたい月に一度は山をあるく勘定になる。次に“足で登った山の高さが、降り^②は差引いて”というのは誤り、“降り^③は別として、足で登った高さ”なのである。

こんな物好きな計算を試みたのは、昨年十一月大磯に住む会員近藤恒雄君から「尚本年はまだ十二月の山行が残っていますが、五万分ノ一で一月以来十回の山行を、

正確に登行の高さを計算した処、過日の奥秩父まで、合計一七、二九五米……中略……大兄の分を計算してみて下さい」という葉書が舞いこんだことに端を発する。同君と行をともしした山行は、

計算済のものを借用することとして、資料を送ってもらい、計算の方法もわかった。つまり汽車電車バスなど交通機関を利用したところは、勘定に入れない。たとえば私が北岳パットレスに登らせても

らった場合、広河原（千五百米）までバスを利用したから、北岳（三千百九十二米）までは千六百九十二米登ったという計算である。尾根を縦走すると上り下りが頗る繁だから、たとえば十月に、栃本―雁坂―甲武信―十文字―栃本の場合は、二千四百十六米を登っている。こうして私は昨年中に高距二万四千七百余米の山坂を、汗を流して登ったことになる。

書げば簡単だが、地図を揃えて取りかかる、山麓の部落の標高を突きとめるのに手間がかかったりして、仲々時間をくうものだ。山行七八回分を調べるのに、私は小半日を要したが、「閑人ですなあ」といわれたが、「未決・既決」の箱に入った書類に、盲判を捺すよりは遙かに興味があるし、結果が出ればこれだけの山坂を登り得る、心身の健康を保持している幸福をしみじみ感するのである。

(一九六七年三月記)

☆スペイン山岳連盟会長
フェリクス・メンデス
氏よりの便り・・・☆

四月一八日付の手紙が同氏から来た。会報二九号及び「山日記」一九六六年度に出てゐるスペインの高峰峯は氏に修正してもらつたものである。今度連盟で会長選挙が行なわれたが、再選、一九七一年まで重任することになったという。尚、UIAAの大会はこの十月にマドリードで開催される由。

（吉沢）

☆故高木菊三郎氏を憶う☆

山崎 安治

昨年二月白金の八芳園で行なわれた年次晩餐会の席上、本会名誉会員に推されたばかりの高木菊三郎氏は、昭和四二年二月八日午前六時一五分、胃ガンのため神奈川県平塚市中南国保病院で逝された。七八歳であった。

葬儀は二月一四日午後一時から平塚市新宿三六二晴雲寺で行なわれ、本会からは植有恒、神谷恭名、村井米子、評議員、小方全弘理事らが参列、植名名誉会員が弔辞を述べられた。当日はことに寒く、雪も残り、参会者は四〇名ほどしめやかな葬儀であった。

高木さんの略歴については会報二五九号に紹介した通りであるが、その生涯は文字通り地図に生きた六〇年といつてよいであろう。滑川道夫編文部省

— 寒波様々 —

氷の竜神峡と袋田の滝

笠井 篤

八年ぶりの大寒波は、ありがたい贈り物をもたらしてくれた。雪とまじしく、たかかわねばならない雪国の人達には、しかたあるまいが、山にはあまり恵まれないう、茨城県に住むものにとっては、この寒波は大歓迎である。それは県東部の八溝山系にある小さな溪谷の滝が凍り、一寸した水壁となるからである。

常陸太田から大子行のバスで四〇分ばかり、男体山に源をもつ竜神峡に一月の週末の一日仲間三人と出かけた。竜神峡入口のバス停から、しばらく林道を歩き、道が切れたところから河原に下りるが、流れの大部分は凍っており、その上を楽に渡って歩ける。この竜神峡には、中程に「亀が淵」と呼ば

道徳資料「日本に生きる日本人の力」の中に「意思と努力の」小字本の地理博士「はいまも本の山にかこまれて元気に研究を続けている」と紹介されてゐるが、それはよく高木さんの生涯を物語っていると思う。

本郷、菊坂の生れで、父親は幕臣だったので根っからの江戸っ子であった。小学校の同級生には故末弘殿太郎、整形外科の大家高木謙次氏らがいる。高木さんは中学進学の時病気がたまり、受験をあきらめ、独学を志すことになった。小学校を出るとすぐ上野図書館に勤め、その間神田の正則英語学校に通い、かわらねドイツ語の通信教育も受けた。明治三九年六月、一七歳の時、参謀本部の陸地測量部の試験に一番でパスし、日給三五銭の雇員となり、ここに地図と高木さんとのつながりが初めて生れたのである。

日本最古の地図は約一三〇〇年前の天平時代の絵図だといわれる。次が延

れる淵があり、そこまでは夏はハイカーで、にぎあうところである。それから上は、簡単に淵をへつことも高橋きもできないので、あまり知られていない。だがこの淵が凍ると、完全にこの年はつまることが出来る。今はまだ渡れるだけに凍っていないが、それよりこの竜神峡に合する二つの枝沢が、出合で何段かの滝になっており、その滝が完全に水壁となつてゐた。釜沢と称する枝沢の滝は、一番下の滝が落口で凍っていないため、その滝のハング気味の岩壁を約一五米ばかり登り、立木を支点に懸垂下降して上の滝つぼに下りてみると、下からは一部しか見えなかったが、一〇米ばかりのきれいな水壁が現れた。水も堅く、ステップを切るのにも切りがよいがある。

このような水壁となつた滝を大小四

暦一〇年太閤秀吉の「全国図説」で、徳川時代にはいと軍用を目的とした絵図ができた。こうした日本の地図の歴史については高木さんの「日本地図測量小史」や「日本における地図測量の発達に関する研究」に詳しく述べられている。後者は昭和三十七年七四歳で東北大学から理学博士を授与された時の論文をまとめたものである。JACの創立メンバーが足をふみ入る前の参謀本部の測量登山について、山岳五八年にその思い出を述べておられるが、穂高岳の三角測量を初めて行なった館測量官、阿部郡田測量官などについて、まだまだお聞きしておきたいことが一杯あったのに、まことに残念である。

白髪、童顔、いつも羽織、ハカマをつけ、会の集りに必ず顔を出されていく高木さんとも、もうお会い出来なくなつた。御冥福をお祈りする。

一山男とパイプ

永原 輝雄

山と煙草のテーマは、没った石川欣一氏の随筆に、数多く見られるが、私が初めて会った時の石川さんは、未だ帝大の学生で、大した愛煙家とは思えなかったが、それでもマドロスパイプは離さなかった。

信濃大町の対山館で泊り合せて我々は、寄合世帯の白馬岳登山を企て、宿の主人の百瀬慎太郎さんも、以前から親しい石川さんに誘われて、加わる事になり、賑やかな一行になった。雨に降り込められた白馬尻の岩小屋で、石川さんのくゆらすパイプは、小屋の中に外国煙草の香気を漂わせていた。中学生で未だ煙草の味を知らなかった私であったが、この香りに快いものを感じた。後年自分が山でパイプを吸う時、よくあの日の石川さんを思い出した。

一九五七年十一月六日夜、ロンドンのドルチェスター・ホテルの大広間で催された、英国山岳会創立百周年記念祭に、日本山岳会代表として、出席された植有恒氏が、当時の毎日新聞社に寄せられた記事は、興味深いものであるから、茲にその一部を転載させて頂く事にする。

……この祭典に参加したのは、世界二十数カ国の山岳会代表者、四百人という多勢だが、男ばかりの会なので、まことに賑わがであった。イギリスの山岳会は、婦人会員を認めないのみならず、正式の集会には、夫人同伴という事がないのである。サー・アノルドランの挨拶の中に、「このような宴会で、婦人達が座席を去る時の、あのホットした気分が、味わわれないのが残念だ」といって、満場を笑わせたが、古老の会員に「どうして婦人を会員に入れないのか」と聞くと、男は山に登

り、女は家事にこそしむのが、本分だと云っていた。晩さん会は、会長サー・ハントの司会のもとに進められたが、女王からのメッセージも読み上げられ、いくつかの祝辞や追憶談もあって、女王への乾杯が終ると、一斉にパイプを吸いはじめた。勲章をおびた正装で、パイプを吸うこの異例は、山岳会自慢のものである。スイスのツェルマットのホテル・モンテローザを中心生れた、山男たちの会であるので、このような正式の晩さん会にも、その因習を持ちこんでいるのである。

……これで見ると、エチケットのやがましい英国では、正式の集りには、婦人の前で煙草を吸う事は、遠慮するようにならねば、男ばかりの山岳会では、この様な席でも大びらに、パイプを吸うことが出来るのは山男の特権であり、如何にも楽しそうな喫煙で、定めし山小屋に相会して語り合うような打とけた喜びを持った事であろう。山頂の憩いのひととき、又は山小屋でストーブを囲んでくゆらす、パイプの味こそ、山男に与えられた醍醐味である。

私はそんなに煙草好きではないが、以前から山に行くときには、必ずパイプを持参する事になっている。それは別段でらう訳ではないが、登山のムードを味う上に於て、紙巻煙草より、びったりするからでもある。又私はパイプマニアでないから、そう沢山パイプを持つていないが、それでも今までに、何本か使いつぶしている。数年前本場のブライヤの生地が手にいったので、手彫りで作ってみたが、自分の好みにはあった手製だけに、以前から持っている有名品より、愛着を覚えて、今でも大切に愛用している。

山男がチョッキの胸のポケットから、パイプをのぞかせているのは、一寸カッコイイものである。(完)

夏山診療所報告
長尾 悌夫

夏山シーズン中、各大医学部の夏山診療所が、要所所に開設され登山者の救助や治療に活躍している。これらの診療所を一つ一つとりあげてみるとその性格はいろいろである。

まず立地条件についていえば、文字通り山の中にあるもの、高原にあるもの、湖畔にあるものとさまざまであり、経済的基盤については、県や大学当局や山小屋等から或程度の援助を受けているものがあるかと思えば、山岳部及びOB会の自弁に等しいものもある。

又勤務員の資格も、医師が主体のもの、インターンが主体のもの、学生が主体のものがあり、又、立地条件から遭難救助に出動する機会が多くて山岳部OBでなければならぬものから、医者なら誰でも動まるものもある。

最近の登山人口の増加から、最盛期には患者が殺到して朝から晩まで診療に追い廻されて散歩一つ出来ないで、入所する医師が敬遠してしまふ補充に苦勞しているところもある。独立の小屋を持つてゐるものは極く一部で、大半の診療所は山小屋の一室で開設してゐるので、山小屋とのトラブルに悩むところも出てくる。

このようにいろいろ性格が異なり、経済的基盤の違いや勤務員の資格の問題などで、無料診療のものとは実費診療のものとは

大学名及び所在地	内科系	外科系	その他	小計
日本山岳会(富士山)	67	2	1	70
日大医(徳沢)	95	55	20	170
東大医(洞沢)	85	107	10	201
日本医大(沢沢, 太郎小屋)	57	76	24	157
東邦大医(西徳高)	31	13	4	48
順天堂大医(燕岳)	159	29	15	203
慈恵大医(槍ヶ岳)	388	138	33	559
昭和医大(白馬岳)	512	88	34	634
群大医(尾瀬, 赤城, 野反湖)	289	292	13	594
東京医大(上高地)	782	555	84	1421
金沢大医(立山)	581	130	57	768
京大医(唐松, 五色)	209	92	40	341
久留米大医(法華院)	83	114	29	226
岡山医大(三保蓮華)	85	59	8	152
計	3422	1750	372	5544

に分れてしまふ。これが登山者の苦情のもとであり、縦走中に医療を受けたが、あるところでは、無料で、あるところでは有料なのは何故かということになる。

山岳会では、医療連絡会を開いて各診療所の横の連絡をはかるとともに、諸問題の調整をはかっているが、夫々の内部事情があつて、診療費の問題一つをとつても一本化は不可能に近い。また山岳会は国立公園協会から毎年交付される夏山診療所に対する助成金の配分の勞をとつてゐる。四一年度は二五万円が交付され、これを医療連絡会参加の二二校と山岳会の富士山頂診療所に配分した。シーズン終了後、岡山大学(三保蓮華)が参加を申し出たので四二年度は一三校になる。山岳会に報告されてきた四一年度の各診療所の患者数は別表の通りである。疾患別分類は夫々分類方式に違いがあるので正

確な統計の作製は難しく、これらを内科系、外科系、その他の三群に大別して分類してみた。総数は実に五五四四名に達し、内科系三四二名、外科系一七五〇名、その他三七二名であった。

北海道大学バタゴニア
学術調査隊(1965~66)

安 間 荘

拝啓 だいぶん春めいて参りました。が益々御清祥のことと存じます。

さて、先般お手紙いただきました件、九州での出張が長びき御返事が遅れてしまったこと深くおわび致します。

JACの山岳用原稿、写真の件につきましては先日JACの村木さんより御依頼がありましたので、こちらの方は今、手配致しております。とりえず私共の隊の行動概要のみお知らせしたいと思います。

隊の名称 北海道大学バタゴニア学術調査隊

Region de Fuego Patagonia, Univ de Hokkaido, Japon.

目的 Tierra del Fuego の西部

ダーウィン山脈及び南部バタゴニア・アンデス山脈の探検的登山。

隊員構成

隊長 辻井達一(35) 植物班長北大農学部助教授(農博)

副隊長 佐伯富男(37) 登山班長第一

副隊長 安間荘(29) 地質班長北大チャムラン遠征隊員

遠藤慎一(29) 北大ナルカン

カール遠征隊員

西村豪(29) 北大コルディエ

・プランカリアマゾン遠征隊員

橋本正人(27) 北大ナルカン

カール遠征隊員

吉田尚利(29) 北大薬学部職員

芳賀卓(25) 北大大学院学生

廣谷晃(24) 北大理学部学生

行動概要(1965~1966)

十月二十二日 横浜港より西村、先発

十一月三十日 佐伯、安間、遠藤、芳賀、橋本、吉田、廣谷、相生港より出発。

十二月十八日 辻井羽田空港出発

十二月二十四日 本隊チリ Hualto

港着

十二月三十日~一月六日 サンチャゴ滞在

一月七日 プンタ・アレナス

一月十二日 植物班ナバリノ島へ(一月末まで)

一月十三日 登山・地質班フエゴ島の

ダーウィン山脈へ

アルゼンチン国境地域
四月三日 プンタ・アレナス
四月八日 サンチャゴ着 植物班と合流
四月十五日 先発隊五名サンチャゴ発
帰国 五月二十二日千葉着
六月二十二日 後発隊二名サンチャゴ
発帰国 八月十五日千葉着
二名は以後一年間チリに滞在

登頂及び試登峰
ナバリノ山塊
1840m峰、1/26 (初登?)
1480m峰、" (")
1860m峰、1/27 ("")
サルミエント峰(2403m) 試登
セロ・フランコ(1800m) 試登
(注) ナバリノ山塊の無名峰(1840)及び(1860)は同年一月初め Jack Miller を隊長とするアメリカ隊が登っているかも知れません。未確認です。なお Carlo Mauri を隊長とするイタリア隊はバックランド峰(標高1900m)に二月六日登りました。

エマヤその他の主要峰の高度変更(公式のもの)
×印変更
Mt. Everest (29028ft) 8848m
K2 (28250) 8611
Kangchenjunga (28208) 8586
×Lhoce I (27923) 8511
×Makalu I (27824) 8481
×Kangchenjunga II (27803) 8474
Dhaulagiri (26810) 8172
×Manslu I (26760) 8157
Cho Oyu (26750) 8153
×Nanga Parbat I (26660) 8126
Annapurna I (26504) 8078
Gasherbrum (26470) 8068
Broad Peak (26400) 8047
Gosanthan (26291) 8013



会 員 通 信

『山の文集』

冠 松次郎

拝啓 御無沙汰いたしました。かねて、御話をいたしました私の『山文集』、『山谿記』全六、七巻、只今神田の春秋社で編集しております。今年中に三冊、来年三冊出る予定になっております。出来ましたら日本山岳会の図書室へひとそろえ書肆より届けさせます。

今年八十五歳、今度の本は私の最後の著書になると思ひます。

私は相変わらず足腰が不自由で外出はできません。元気で食物もおいしくよくたべられ、酒もちょびり頂きます。八十八歳まで生きられると、息子がロンドンから帰ってくるので好都合ですが、それまでどうですか。敬具
(吉沢宛) 三月十日付

☆アラスカへ☆

津田周二

拝啓 陽春の候と相成りました。貴下様益々御清祥の段慶賀に存じます。切

てこの度、日米合同アラスカ遠征登山に参りますに当りまして何かと御配慮を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。今、五日午後七時三十分羽田発のノースウエストで出発する事に相成りました。無事大役を果し公私共満足出来る海外遠征を終えたいと念願しております。出発に当りまして絶大な御声援を感謝し御挨拶申し上げます。敬具
昭和四十二年四月五日
兵庫山岳連盟会長
兵庫山岳連盟
一九六七年日米合同
アラスカ登山隊長
藤田博

☆兵庫連隊員として☆

藤田博

前略
私は先生が先年南米に御出発されます前に神戸にいられた時、津田兵庫山岳連盟会長と共に「カキナ」で夕食を共にさして頂きました。藤田です。

今度、一九六七年日米合同アラスカ登山隊の一員として待望の水氷を踏めますのを楽しみに致しております。この登山隊の今日に至るまで津田会長には本当に大変な骨折を頂き申し訳けないと思っております。

欧米人と東洋人が約十五名ずつ参加して合同登山隊を編成して一つの山に登るといふ珍らしいケースになりました。たが、例え山の初登頂には失敗してもアメリカ隊との友情に於ては必ず成功して参りたいと思っております。

既に津田会長より最終的な計画書は発送された由、承っておりますので、本日はアメリカ側の隊員名簿を同封致します。

隊長の Randall は数回のアラスカ・ニューコン山域の経験者で私達が当初六月七月で計画を進めていた処、左の理由で四月に繰り上げる様提案して参り、計画変更した次第です。

左 記

一、Mt. Bona 山域においては、三月〜四月が登山の最適期と思う。天候及び水氷の状況が比較的安定している(クレバスが少なくない)。
二、カナダ山岳百年記念登山及、アラスカの百年記念により、今夏は飛行機の輸送が大変混雑する。(ブッシュ・パイロットの問題)
以上

尚前にお届けしましたニューコンの計画書では、Mt. Lucania 周辺の地図が不備のため、地図作製の興味がありましたが、今度のボナ山域は米国の立派な 1:63,500 の地図が最近出来上っております。

然しこの地図は航空写真より作図したものと思われ、私達はトランシットを持参し、ボナ山頂を高さの基準点として、その西の未踏の山々の正確な高度を三角測量により求めてみたいと計画しております。

私は戦時中、工兵将校として測量を勉強した事があり、測量には興味を持っておりまして、登山活動のある程度犠牲にしても是非やってみたいと思ひます。

しかし、寒冷の山稜で果してどの程度の測量が出来るか、これはアラスカ一年生の私には全くの未知数です。

次は今年の最終計画に、現在アラスカに残されている最も高い未登峰である Mt. Denali とありますが、これはアメリカ隊より申し参りました事の受け売りで、私としては調査不十分のまま、印刷物にしてしまいました。

果や市の予算(補助金)をもつて政治的な理由もあり、かなりの抵抗を感じながら活字にしましたので、御寛容下さい。

しかし発表以上、責任は当方にあるので、アラスカに行きました上で、アラスカ全域の地図が出来れば

購入して、帰国後十分に調査することをお約束します。

前記の 1:63,500 の地図が全地域に亘り入手出来れば持ち帰りたいと考えています。

装備食糧については当方は総て国産で参りました。

アメリカ隊の装備食糧については、よく比較研究してみたい考えです。

特に食糧は、彼らのコンパクトな食糧は是非勉強したいと思ひます。

今後、計画の進展にともない、逐次御報告して頂きます。

JAC の皆様によりしくお伝え下さい。

末筆乍ら、先生の会報で編集の御努力に心より感謝して頂きたいことを述べさせて頂きたいと思ひます。

毎月のご編集が如何に大変なことか想像するだけで私などはぞっとします。

然しこの会報が中央と地方を結ぶ唯一のパイプであることを私たちは身をもって感じ、会報を受け取るたびに感謝しております。

(小生第二次先発で三月二十日に出発します。)

勿々

アコンカグア

南壁登攀

東京山岳会 青木敏 (六一七九)

前略、出発前は大変お世話になりました。筆不精のため、大変失礼しています。二月十一日アコンカグア南壁に成功いたしました。二月十六、二十〇〇米の第三キャンプを出発、稜線直下にビバーク、十一日頂上より北面を下降ランダムムラへ下りました。登ったのは、青木、野崎、大橋と通訳として現地で参加してもらった北大OBの増山氏の四名です。残りの立田も十一

日北面のランダムムラ(六、二〇〇米)より頂上に立ちました。

遭難の誤報が東京にも入ったそうですが、どうしてそんな誤報がでたか、当地においてと判りません。

今は山を下り、ブドウで有名なメンドサの町におります。もうすぐはじまるブドウ祭をみた後アノスに帰り、バタゴニアの調査に行きたいと思っております。皆さまによりしく。

(三月四日付、メンドサにて 松田宛)

お元氣にお過ごしのことと存じます。

私達の隊は三月三十日、ここ東アフリカのナイロビにて解散となりました。

昨年の十二月に Aconcagua を出発し、サハラの山タハト山、三〇〇〇米のぼり、お正月にサハラ横断を終えてナイジェリアのカノに着き、カメルーン、チャドを経由してスーダンに入ろうとしたが国境閉鎖で思うにまかせず、大統領のサインをもらって、や々と通過してきました。

我々のルートはリビア沙漠の南部でサハラよりも道路事情は悪く一日に十九キロしか進めない時もありました。

炎天下のタイヤが砂に埋った時の穴は作業、サンドマットを入れる作業、非常に苦勞してスーダンのヘルツウムに着きましたが、アフリカのウガンダとスーダンとの国境はまたしても閉鎖してゐること、予定が二カ月も遅れているので自動車旅行はこまでになつてしまいました。飛行機でカンパラに及び、一隊はルーエンゾリヤのマルゲリタに行き、一隊はケニヤ、タンザニアに及び、キリマンジャロに行きました。

(マルゲリタは日本で三登、東陵からは初登と思われ、三本、久富)三月二十日、キリマンジャロは五

名で一般ルート(女性二名を含む)和田、藤沢、岡部、岡崎、黒瀬。タハ山の方は二月十一日朝日の夕刊に載りましたのでそちらの方を読んでいただきたく思います。

思えば六ヶ月半は永い月日でした。山男たちが車を運転してサハラ沙漠とリビア沙漠を横断したのですから種々の苦勞に会いました。

ケーブタウンまでは行けずじまいになりましたが、山は思うようにのぼれませんでした。それでも四地域域の最高点には立ったのですから満足すべきかも知れません。(即ちアトラス山脈ツブカル山四一六五米、サハラ、ホガール山地タハ山三〇〇四米、ルーエンゾリ、マルゲリタ山(五一一一米)キリマンジャロ・キボ峰(五八七七米)帰国後、珍談奇談をお話しできることを思いつつ。

お身体を大切にお過ごし下さい。

草々

2/14 Kenya Nairobi 2/2 (吉沢宛)

ダイヤモンド通信(1)

早稲田大学山岳部

二月二十二日無事デヘランに到着しました。ホテルの窓からみるダイヤモンドは予想していた様に、富士山を大きくしたような山ですが、真白く、一きわ高くそびえ立っています。寒いなホトカ、モスクワを通ってきましたので、寒さは何とありません。高度馴化は山に入ってから考えます。まずは羊の匂いのフンフンする食事になれるように努めています。三月末までにはダイヤモンドを終えたいと思っています。とりあえずデヘラン到着のお知らせまで。

(二月二十三日付、学生部あて)



南アルプス南部登山道の一部通行禁止について

静岡県知事 竹山祐太郎

本県では昭和四十二年度事業として基幹線林道東俣線の工事を実施いたしました。

については工事期間中登山道の一部が通行不能となりますので登山者に対して、下記事項に充分注意するよう周知方についてよろしく願ひします。

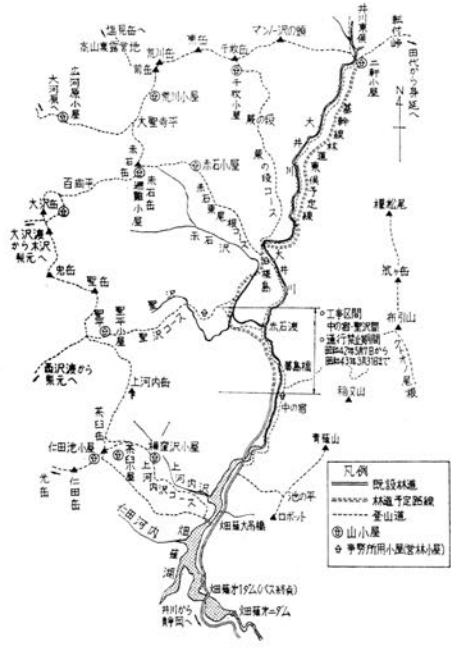
記

一、工事名

基幹線林道東俣線建設工事

二、工事区間

安倍郡井川村中ノ宿から聖沢間



(大井川右岸の登山道ぞいに工事が行なわれます。)

三、工事期間

昭和四十二年四月一日から昭和四十三年三月三十一日まで。

(この林道建設工事は昭和四十五年まで毎年引続き二軒小屋まで実施する予定です。)

四、通行不能期間

昭和四十二年五月七日から昭和四十三年三月三十一日まで前記工事区間の通行は不能となります。

五月六日の連休あけまでは一応通行が可能であります。工事は四月一日から施工されていますので充分注意してください。

五、迂回路

現在の登山道の近くに迂回路を設けることは非常に困難であり、預つておいた逸品(?)の釣竿をとり来ていたが、又それを忘れて帰えってしまふ。これ以上の模範生はいないと思ふ。その小方君が、かつて〇〇〇へ行ったことがありと思ひ給へ。食糧は現地食といふことに慣らされている君は、ここでおかずを何かと鵜の目、鷹の目で、雄草や怪し気なキノコを探し廻ってきた。

食へられますか?

—武田さんと 出逢い—
小方君の

又これと逆に井川村畑雑方面から上記コースを登山することもできません。

会報編集委員の小方全弘君には、このところいろいろ世話になっている。会報用に送られて来た原稿で、直ぐ行数のわからないようなものは、全部小方君の方へ廻して、一七字に書き直してもらっている。こんな縁の下の方力持ちをやっている君には、いくら感謝しても足りない。

ところで彼も、相当の周章でものど、預つておいた逸品(?)の釣竿をとり来ていたが、又それを忘れて帰えってしまふ。これ以上の模範生はいないと思ふ。その小方君が、かつて〇〇〇へ行ったことがありと思ひ給へ。食糧は現地食といふことに慣らされている君は、ここでおかずを何かと鵜の目、鷹の目で、雄草や怪し気なキノコを探し廻ってきた。

欲張りの彼は、序でに東京へもと、抱えきれないほどのキノコをエッチラ、オッチラと〇〇小屋まで運び込む。そのキノコが食べられるものかどうかはまだわからないのである。そこにはまた、植物学の大御所で、〇〇の守護神、武田久吉博士が、鎮座ましましていたというわけ。恐る恐る彼は御前に伺候して、

「先生、これ食べられますか」と伺いを立てたのである。こりやわたしの大好物でね、こんなに沢山よくあったね、どうも済まん、有難う」

先生はいとも無邪気且つ公然と、小

したがって、上河内沢ルートを登山するか、下山者は二軒小屋方面へ抜けて下さい。

方君の獲物を、そっくり手早く、自分のリュックにしまわれてしまった。折角拾って来た小方君、アレレとも言えず、なす術も知らず、ボカソと開いた口が、いつまでもふさがらずにいた、という次第である。

日本語の会話には主語はいらない。そして、敬語と口語で区別のつかないものもある。この場合は、武田さんにも都合よく、小方君にはやられた、と思わせた「食へられますか」であった訳だ。

その後わたしは、その釣竿を、役員会の時に持っていてあげたといっておきながら、忘れたことは当然だが、彼もそれを催足することを忘れていた。いずこも同じ秋の夕ぐれである。当の釣竿はいまだに事務所隅で、薄いつきりをかぶっている。(吉沢一郎)

「山岳」61年の図書紹介欄について

「山岳」の図書紹介欄は戦後久しく休んでいたが、60年号から復活した。図書の選択は編者が会員数氏の意見をきいて行っている。実は61年に掲載すべき書目には、他に深田久弥氏「ヒマラヤの高峰」全五巻及び別巻写真集があり、これは私が相当時間をかけて書く予定をしていたところ、昨秋来身辺繁忙のため、遂に目的を果し得なかつた。「山岳」の本欄に取上げるべき立派な労作であったにもかかわらず、右のような事情で果たせなかつたことを、遅ればせながら著者深田氏並びに会員各位へお詫びする。

(望月記)



図書紹介

≡森林・草原・氷河≡

加藤 泰 安著

この書物には、長短二十五に及ぶ文章がおさめられており、それには登山、遠征の記録、登山談義、随想、人物論など多種のものが含まれているが、読み通した印象では、それらが総合されて一人の登山者の非常に潤達な自伝となっている。

少年時代、父君から東京におけるヘディングの講演について教えられ、中央アジアへの憧れを呼び込まれて以来、蒙古高原、マナスル、チンゴリザ、サルトル・カンリ、ニエーギニア高地へとつづく著者自身の山旅、登山、遠征の集積は、読者を羨望せしめるとともに、読者への説得力を強めている。その謙虚さにもかかわらず、その経験の幅広さは、日本の規模を越えているのである。単に規模に限らず、著者の抱きつづけた登山、探検への夢というが、理想といったものが、全部を貫いていることも、見のがせない本書の魅力であろう。

「全く科学がエクスペディションのロマンティズムをメチャクチャにしてしまった」と著者は「チンゴリザ登頂」のなかで慨嘆している。著者の場合は、未知への憧れとしての遠征といったもののへの、終生縁の切れないほどの愛着がある。

「カラコラムへの道」の末尾に「私の心の中では、チンゴリザの上から見たコンダス氷河、シアチェン氷河の山々、特にサルトル・カンリの端麗な山容、長大なテラム・シェール氷河が青空にきえてゆく彼方が、日一日と強く呼びかけてくる」と記されているように、著者の心はカラコラムへ踏み入っても、さらに、その西北の空へと飛んでいる。巻末を飾る「同心円」と題する文章では、ピラフォンダ峠のあたりで、氷河上に見出した一羽の千鳥のなきがらに托して、「千鳥の旅を果てしなく思いながら人間の世界の旅の不自由さをつくづく思わぬではないだろうか。アジアン陸への激しい情熱を吐露している。ヒマラヤで陸封型のマスを釣ろうと夢中になるところにも、著者の一貫した夢が存するといつてよい。そのような夢の要素こそ、本書が発散する独自の魅力の一つなのである。

と同時に、本書には軽妙な表現ではあるが、実は鋭い忠告的な警告が、今日の登山者に向けられている。著者は「中入り後の切れの戒め」などと「ご祖先さまの遺訓」を持ち出したりするが、チンゴリザやサルトル・カンリにおける著者の適切な判断に裏打ちされているアドヴァイスであるから、読者に訴える力は大きい。

「登山とは元来、どう考えても文化的行為ではあっても、文明的行為ではなく、向人的であるよりも、むしろ厭人的なものであるはずである」という考えは、本書のなかで二度も述べられている。この考えの上に著者の登山論は展開されていると思われるが、それは登山者への警告を含んでいる場合においても、より普遍性をもつ文明批評の域に近づいている。桑原、今西両教授のような、すぐれた先輩から、著者が学んだ面も大きかったに違いない。そういえば本書のなかの「ロマンチスト今西錦司」は人物論として、なかなかの好文だといつてよからう。終りに当って、少々注文めいたことを述べさせてもらうならば、その一つは本書の内容の配列についてである。先に列挙したいくつかの遠征に関する主記述の合間に、それに関連した短文が挿入されているわけだが、そのような短い文章は、むしろ纏めて登山論的な標題の下に置いた方が、関連性に味って読めたりするし、また遠征余話といった題下に集められるものもあるように思われる。実ははじめ読みたい文章から読んでいったときには、さほど気にならないが、折角マナスル遠征にも参加した著者なのに、これについての独立した文章のないことが惜しまれる。いわば伝統的な意味をもつ書物であるだけに、著者の立場からのマナスル紀行が加わっても、よかったのではあるまいか。

最後に、ちょっと気のついたことだが片カナに少々誤記が目につくので、改版の際には訂正をお願いしたい。たとえばウィットリオ・セラがヴィクトリオ・セラ、スプリング・ボードがスプリング・ボールド、タイヤード・ライフがタイヤー・ライフ、ショート・カットがショー・カットといずれも誤記されている。またインター・プリーターは一語でよいし、デイスカクションとされたといった表現も奇妙にひびく。ちょっと気になったので挙げ足とりではなしに付記しておきたい。

著者堂刊、昭和四一年九月
四四六頁、定価一五〇〇円
写真および地図入り
(島田 巽記)

山登りの会報にカナリヤの話ではないか、と思われようが、これはなくなれた高野鷹蔵さんの本のことなのである。

戦後まもなくであったと思う。高野さんに「私はカナリヤ」という古い本を持っています」と申したら、そのときカナリヤはないが、いまだ研究しています、ということであり、近い中にまた書物も出版されますよ、とのことであった。私の持っている高野さんの著書は三冊である。

①高野鷹蔵著「カナリヤ」昭和三年三月、高野鷹蔵発行。
②高野鷹蔵著「ローラーカナリヤ教本」昭和九年七月、飼鳥界社発行。
③高野鷹蔵著「カナリヤと飼育の要領」昭和二十四年八月、東洋館発行。
なお私は持っているが次の一本がある。

④高野鷹蔵著「小鳥」昭和二十七年九月、朝倉書店発行。

さて、①「カナリヤ」の序文の一部を見ると、「書くのはいやでもあり時余りありませんでした。それで結局私が関を見ては主要を古川君（私注、「鳥獣」誌編集後記）にお話をし、それを同君が書きつづることにしました。勿論今迄私が色々のものに書いた述べたりした記事を参照されて本書が成ったわけでありまして」とあるようにこの本だけはすべてが高野さんの筆になったというのでは、ないのである。

一番高野さんが力を入れた本は③の『かなりや飼育の要領』であろう。この本は中級以上の飼育者のためのものらしく、序文にも「カナリヤ一番（ひとつがい）と箱とこの本を買って来て、うまく鳥を作ろうとするのは、ちと無理だ。実を云うと、この本が全くの初心者に向くように書かれていないからである」とある。しかし、われわれ門外漢でも文章はわかりやすいし、いろいろこの鳥について教えられるところが多いので、つい読んでしまいう本である。

高野さんは山登りの専門書を残されず、カナリヤの専門書を多数残してくださったのである。そして、ローラーカナリヤはこの高野さんがはじめて日本に入れ、普及されたということはおぼえておいてよいことであろう。

(二・二六)

『高山簡記』
中国青年登山協会編
中国語の本なので仲々親しみにくい本ですが終戦後、中華民国登山界が初めて出版した登山記録集です。今迄台湾山岳協会の会報しか中国関係は見る事の出来なかった台湾の山について初めて記録集が出来た事は非常に意義ある事だと思えます。

地図も略図ですが、玉山・雪山・南湖大山・中央尖山・大霸尖山等が出ており、参考になると思います。中には日本大学山岳部と中国青年登山協会、合同登山報告や、日本の方々には、なじみの深い林文安さんの山行記録が出ております。

今後日本と交流の多い中華民国登山界が山岳書をどしどし出版され吾々の眼を楽しませて欲しいものです。

なお台湾登山については、入山許可制を中華民国政府が取っており、個人では取得出来ませんので「山」前号「中華民国台湾省への登山手続について」（五頁）を御参照の上海外山担当大塚理事又は日本山岳協会の方へ、よく問合せ下さい。

(小味秀純)
〔編者注〕（七頁下段最後へ）

飛驒の年輪

—山と民俗—

熊原政男著

「登山の夜明け」の著者、金沢文庫長熊原政男氏により、飛驒の山と民俗について一本にまとめられたものである。飛驒の中山七里は著者の故郷だといふ。「私はいまから五十年ほど前の故郷の姿をなつかしく形書きとめ、将来に残そうとした。それはここに書かれたような故郷の姿はもう今日の世では見られないものの方が多いほど飛驒も変ったからである。これは私が飛驒を故里として生れたことの生き甲斐を示す証左としてであるばかりでなく、故里の山川につながるゆたかな思い出をもたないままの若い人のために心の糧となれかしと思つてこの本をまとめることにした」と著者はあとがきに述べているが、これがこの書物の内容をそっくり物語っている。

主な内容は、南飛驒風物誌、飛驒の狐狸と人、山に憑かれた異端の伝説、円空と播磨、円空の歌、飛驒の円空、乗鞍岳の謡歌、乗鞍岳十日記について、飛驒の観音講、百年前の世界一周、加藤素毛の句歌集、となつていて、いずれも飛驒のことが強くにじみ出ている。ことに興味深いのは、南飛驒風物誌で、旅の芸人、青の祭、桃の節句、お盆の日、山村の年越など十三篇にわたつていまから半世紀まえの飛驒中山七里の山村生活がなつかしうえがき出されている。円空の歌、飛驒の円空の二篇も円空に関する文献として読みこたえのあるものである。

私たちに馴染深い、飛驒の風物について、とつとつと著書は語りかけてくれ、しつとりと心にふれる好著である。昭和四十二年二月、錦正社発行、定価四百九十円。二百六十七頁。

☆アフガニスタンの山旅☆

(山崎安治)

文 安川茂雄
写真 白旗史朗

サブ・タイトルにヒンズー・クシユ登山の記録とある通り、第Ⅱ次RCCによる一九六五年のヒンズー・クシユ登山の記録である。著者は「あとがき」で、正式報告といった性格の内容ではなく、写真に添えた個人的な紀行にすぎないといふおられるが、隊長の手記でもあり、公式報告と解してよからう。

さすがに文筆になれた安川氏の文章であるだけあって、すらすらと楽しく読める。そして、この計画の発端が「蝶々が一匹縫製海峽を渡つていった」という詩に影響されていることとは、全編に渡つてロマンチズムがみなぎっている。

ただいくら初めての海外遠征であるといつても、著者は、あまりにも老練だとか、四十歳を過ぎている私には大変であったという様な記述が多すぎるのが気になる。六十二歳であった積年のマナスル登頂記にも、自らのことは余り云つてなかつたように思う。まして、安川氏の年令にしては少々この点はひかえてもらつた方がよかつたのではなからうか。

それから多少気になることは地図である。五三頁の概念図でも、山脈の連がり具合からみて、インダス河の流れるところがないし、巻末のムンジャン山群の地図にしても地図の北の方向が指示されてなく(どうもこの地図は北が上ではなさそうである)、他の地図と比較してみるとの不便である。一体この隊の登つた山が何処にあるのかをチエツクするのに大いに手間がかつた。又この種の地図には、ローマ字も入れておくのが親切であらう。

尚この隊の計画が新聞に発表された時には、たしかその目標にニコラス山脈が入つていた様に記憶しているが、この山のことが本書には何処にもふられていないし、どうも登山目標からして極めて不明確である。

アクティブな活動が続いている第Ⅱ次RCCの中央アジア登山委員会の派遣した公式の隊である以上、この辺だけは明確に記してもらいたかつた。当初私達は、この隊がソ連とのアプローチによってワハンの許可がとれる様な印象を受けていただけにその点は失望させられた。

白旗氏の写真はいずれも素晴らしい。巻頭の逆光にかがやくゴイ・イ・キバや、その次の頁の、ベニセント・スノーとゴイ・イ・バンダコールの写真などは、ヒンズー・クシユの写真としては私の見たものの中では、最も優れたものであつた。

それからもう一つ特記しておきたいことは、この報告書が、帰国直後に早くも出版されたことである。出版界のベテランが隊長であつたことにもよると思うが、なかなか出来ないことである。

なお、吉沢評議員筆の本書の書評が、週刊読友(42・2・24)に出ているので御参照下さい。

昭和四十一年十二月二十五日、あかね書房発行、フルス版二九五頁、写真多数、定価八五〇円。(Y・M)

エーデルワイス第30号

—アンデス報告特集号—

エーデルワイス・クラブのアンデス隊(一九六六年)の正式報告——エーデルワイス・第30号——が、つましやかな形で出来上つた。

ペルー・アンデスへ女性だけで行つたのは今までにこの隊だけであるから、向うでは各方面からいろいろ歓迎されたらしい。ブラジルで有名なジョビーマで、自ら女性のホテルまで出て説明しているなどは、そのよい一例であらう。

この隊は、皆さんも御承知かと思うが、最初はカンジロバのデニ・ター・ル・チュエリやペリー・ヒマールのカン・グルを目標にしたのであるが、ネパールの事情で断られ、次はヒンズー・クシユのシャ・フラディ、これは女性だけではということでも許可となり、三転して最後に、ペルー・アンデスということになったのである。

その間、松田夫人がカトマンズへ単身飛んだり、資金の面でもそうそう延びれば困つたことも起つたろうし、で、隊員やそれをバックしたエーデルワイス・クラブの人達も随分とやきもきし、苦勞のし通しであつたことと思う。彼女らが、船や飛行機で最終的に、日本の土地を離れた時の気持ち、わたしにも判り過ぎるほどわかるのである。

そしてコノチャ峠を越えてワラスに入り、例の如く谷川さんのお世話になりながら、カウヤラフの峰に登り、プカランラでは、思いがけない頂上近くの大クレバスで登攀続行を断られたが、ランペールの様な海千隊にしたところで、同じ事情でプカヒルカ・セントラルに破れたことを考えれば、か弱き(か弱きの誤り)女性隊が、一〇〇米を残して敗退したからとて、決してその失敗に、酷しい鞭をあてることが出来ない。

兎に角、ペルーの山々とそこにある風物を満喫して無事に帰って来たのであるから、それだけで彼女らにしてみれば満足だつたであらうし、われわれにしても、それ以上のことを望むのは無理であらう。

この報告の中には間違つたことも書かれてあるが、(例えば「プカランラの研究」の五行目に、コルディエラ・ネグラはその名の通り五〇〇〇米以下山の連なりでは誤解、ネグラの北部には、五一八七米の Pico Roaure があるのが一つ、それから54頁と99頁にある、クラブ・アルバイン・フランセーズというのは間違つた字の英仏混合で、正しくは、クラブ・アルバン・フランセである)われわれに對し、多くの示唆的である、類案らしい記述も見られるのである。

殊に黒石タターの医務報告は、素人のわたしには面白(?)かつた。NTVから派遣された亀井嬢が、女性特有の病氣と高山病が重なつて、ひどい目にあつてゐることを克明に書いてゐるが、読んでいながらもその苦しみがどんなものであつたかを同感出来て、気の毒な思ひがした。

最後になつたが坂倉隊長が、その前書きで、「エーデルワイスの花が、アンデスの山に咲いた最初の花となつた」と書いてあるあたりは、エヘヘと誰かがどこかで失礼な笑ひ方をしているかも知れないが、母君の遺骨をベイス・キャンプの地に埋めて、永遠の冥福を祈つたとあるくらいは、ちよつとホロリとさせられる一幕である。

尚、失敗話はよく読んで、われわれも深く胸裡に刻みこんでおかねばならないが、「松田隊員のお点前で、原の真中にポーターのボンチョを敷き、野点をした」とあるところは、流石に女性隊であるところを見せてゐる。

(吉沢一郎)

(六頁下段より)

合本文献も、会報二五九号一五頁に紹介の「台湾登山報告集」と一緒に合本しました。御関心のある方は、この合本集を御覧下さい。(松田)

内情報

東京支部

創立二十周年記念山行

東京支部20周年記念山行は会員の誰でも参加出来て、静かな晩秋の山歩きが楽しめるようにと、奥武蔵比企の丘陵歩きを計画した。

早朝七時半、東京駅前の貸切りバスは、途中川越街道に車輛の混雑があったため意外に時間がかかる。車中の無聊を利用して、本日の行事に当り主催側を代表し、沼倉委員長から支部創立20周年記念山行の挨拶があった。

最近婦人会員による海外遠征の目覚ましい活躍にひきかえ、マナス登頂以来すっかりなりをひそめる山岳会に嘆ずる声あり、曰く支部20周年記念海外遠征如何やと、嘆く勿れ、ひそかに企画することをほめかしチョッピリ意気のあることを……その節は諸氏の御協力をお願いし、是非実現したいものである。

更に事業担当より記念行事の一端であるペーパナイフの鑄物(型千円)の車内頒布は、例によって抜目のない熱心さに、持込み分はたちまち売切れの盛況振り。バス下車地の橋場到着は11時少し前であった。

ここ定峰高原大霧山へのコースは、晴れあがった秋空と、心地よく頬をなでるそよ風に送られつつ、一行40名足よりも軽やかに、新田峠へと向った。

ようやく色づきはじめた山の膚、近くの畠の農耕の老婆、足もとの雑草もすべて山村の風景に調和して、せせこましい都会生活者の荒んだ心を慰め、やわらげてくれる。

栗和田部落の途中で一休み、登りと云えない様な峠路を登りつめて、昼前には峠に着いた。展望のあまり良くな

い峠ではあったが、それでも古びた峠の標杭がなつかしく、三々五々日だまりに腰を下して昼食をとった。

食後、いよいよ尾根路を大霧山に向う。狭い尾根路はそれでも秩父側、比企側と展望が開け始め、尾根を渡る秋風に追いつけられるように登って行く。頂上直下、些かやぶが下手を拒んだが何となく頂上に上った。12時30分。

やや狭い頂上には、10人程が休める広場があり、秩父市側がひらけている。多人数では休み場所もないので、頂上を通り越して、下り始めた広場で一行を待った。

なだらかな尾根の下り登りをくり返し旧定峰峠へ。峠より今日最後の登りに一汗かいて見晴山の頂上に着く(14時15分)。全員元気に集合し、記念撮影、感想の録音、神谷名誉会員の音頭による万歳三唱を行なう。

一休みの後ドライブウエーが通っている新定峰峠へと下る。峠からは廻送しておいたバスに乗り、小川町へと下った。

定峰高原も、笠山、堂平山、二本木峠、登谷山等は、若いハイカーで非常に賑やかであるが、ここ大霧山のコースはまるで忘れられたように静かであった。

「まるで我々だけで借切ったように静かな半日の山歩きが楽しめた」と日高さんのお言葉にあったように、落葉を踏み、やぶを分けて歩いた比企の丘陵歩きであったが、参加者皆それぞれに満ち足りた思いで、20周年の記念山行を楽しんだものと思う。

山麓の町、小川町では坂倉さんより小川町の名酒の寄贈があり、アルコーの勢いもあってか、各氏自慢の咽喉も披露され、川越街道帰路の車の混雑さも忘れ、車中多に楽しんだ。

× × ×

カラコルム・ヒンズー・クシユ学術探検隊公式報告書の寄贈

図書委員会

この公式報告書の出版完成については、会報二五三号に今西錦司氏が詳しく紹介しておられるが、この度、今西錦司氏の御厚意により、京都大学カラコルム・ヒンズー・クシユ学術探検隊委員会より、本会のライブラリーに

Results of the Kyoto University Scientific Expedition to the Karakoram and Hindukush, 1965, 全八巻が寄贈されましたので、御知らせ致します。

いずれ、しかるべき方に書評をお願いすることに致しますが、とりあえず御紹介少々御報告致します。

末筆ながら、本書の寄贈に尽力された今西錦司氏に厚く御礼申し上げます。

☆ラトガース大学レン・キー氏歓迎会☆

海外連絡委員会

アメリカ、ニュージャージー州の Rutgers (The State University of New Jersey) 大学(プリンストン大学の姉妹校)では、創立二〇〇周年を記念して、各大陸の最高峰ならびに主要な高峰に Rutgers Flagを立てる計画をたて、その中の一として日本の最高峰富士山に登頂

するために John Lenkey III 氏が二月下旬来日した。

同氏は三月二日に本会ルームを訪れた後、早大山岳部OBでローレンス・シヤール登山隊員の山本、白鳥両氏の案内により三月七日登山、山頂観測所に一泊の後、八日無事下山し、待望の富士山頂にラトガース大学の旗を立てることに成功した。

本会海外連絡委員会では、三月十四日夕、ラトガース大学の同窓会と共催により、麻布国際文化会館で歓迎会を開催した。

尚同氏の話によればエベレストの山頂には飛行機から校旗を投下したが、山頂に落とすことには失敗した由。(当日の出席者)

John Lenkey 夫妻、William Loren、井村徹(以上ラトガース)、三田幸夫、島田興、佐藤久一朗、石原憲治、山崎安治、錦織保清、飯野亨、堀川英四郎、松田雄一(以上JAC)、山本聖一、白鳥健二(以上早大山岳部)他にラトガース大学名誉博士の松本重治氏が、ロビーに顔を見せた。(松田)

外国人登山家の来日ニュース

このところ、日本の山は世界中の登山家から注目されている。来日する登山家も年々多くなり、アルバイン・ジャナルの山崎氏の記事や、ヨークシャー・ランブラス・クラブ、ジャーナルのガウイング氏の記事、JACの「山」の、コンバース氏の記事などは、これら日本の山の紹介に大いに役立っていることと思われる。

ところで来日する外国人登山家の数が増えるにつれ、本会海外連絡委員会は、その応接に嬉しい悲鳴をあげているが、一度に一〇人以上ものメンバーに來られては、大変である。今後は何らかの受入機関を真剣に考える必要があろう。

ところで、近く来日する海外からの登山家で本会に直接連絡のあったものを紹介すると次の通りである。

○アメリカのラトガース大学山岳会の John Lenkey III 氏は冬富士登山のため二月二十六日来日。

○コララン・クラブの Keith F. Burchard 氏は二月下旬来日。同氏はしばらく仕事で日本に滞在の予定であるが、一九六〇年のインドエベレスト隊の副隊長でもあり、一九五八年のチュー・エーニ隊の隊長代理をつとめたすぐれた登山家である。

○アルバイン・クラブの Richard Gowing 氏。二月下旬来日、六カ月の予定で東海村原研に滞在の予定。

○フランス山岳会のカストン・レビエール氏。三月末来日の予定(会報二六〇号参照)

○アルバイン・クラブの Major Mike Bardsley 氏。五月七日二十日の予定で夫妻で来日。日本の山を登る予定。同氏はグリーンランドの探検で知られるボーラー・メダルの保持者で、他に一九五八年のラカボシのリーダーもつとめ、一九六二年にはアラスカ、六三年にもユーコンへ出かけている。本会では、スライドによる講演を行なうことになっている。

○ドイツ山岳会の Otto Heinrich Lorenz 氏。五・六月にかけて来日、北アルプス及び富士山に登山。

○ロバート山岳会(二五・四〇名、七・八月にかけて日本の山の登山に來日の予定。

○一九六八年夏、アメリカ、シェーラ・クラブのメンバー一四〇名、ジェット機一機をチャーターして日本の登山に來日の予定。

○オーストラリアの探検協会 Ausventure Holidays とも十五名位のメンバーを日本の登山に派遣したい意向である。(松田)



常務理事会

▽日時 二月二十七日、六時三〇分
▽場所 日本橋電報館
▽出席者 加藤、辰沼、村木、大塚、松田、宮下、川崎各常務理事
▽議事

- (1) 来年度の方針について
- (2) 支部のあり方について
- (3) 新役員候補者の検討
- (4) ルーム移転の件
- (5) 三月二日の理事会提出議題の検討 (以上)

三月定例理事・評議員会

(二日・ルーム)

▽出席者 松方会長、三田副会長、理事辰沼、村木、松田、飯野、宮下、倉知、住吉、山口、長尾、竹内、竹田、評議員—深田、村井、藤井、折井、石原、佐藤、中田、東京支部—沼倉委員、婦人部—武田、岡部、三枝 (以下委任) 渡辺副会長、理事—加藤大塚、川崎、小方、広谷、評議員—吉沢、中屋、伊藤、高山、津田、監事—松本

- ▽議事・報告事項
 - (1) 通常会員総会開催の件
 - 四月二十二日(土)四時より、東ドイツアジア研究協会にて開催、引続いて六時よりホールにて春季懇親会を行うことを決める。
 - (2) 新役員推薦の件
 - 常務理事会にて目下検討中につき、次回理事会迄待越すの件
 - (3) 昭和42年度予算案検討の件
- 飯野常務理事より概要説明あり。本

案を総会にかけることを承認する。

(4) ルーム移転の件
かねてより、ルームの移転先を探していたが、この度、神田錦町河岸の向井ビル五階に適當なスペースがあり、この場所に移転しては如何かとの提案があり、種々検討の結果、移転する方針で常務理事会で準備をすすめることを決める。

尚移転に要する経費を募金する必要があるが、募金計画については、加藤常務理事が中心になって募金委員会を設置する予定。

- (5) その他報告事項
- ① 入会申込書用紙の改正について (松田)
- ② 多田等親氏逝去の件 (松田)
- ③ マイク・バンクス氏来日の件 (松田)
- ④ 山岳61年号刊行の件 (村木)
- ⑤ 国立登山センター開所式の件 (中田)
- ⑥ ニュージーランド登山隊帰国報告 (山口)

婦人部の山口、武田、岡部三隊員より帰国挨拶あり、簡単な報告があった。

尚理事・評議員会開会に先立ち、ラトガース大学のレンキ氏氏が同大学同窓会の井村氏、富士山へ同行する予定の早大OBの山本氏と共に来賓、今回の富士登山についての計画説明を行い、本会の協力についての謝意を表した。本会より、ペナントを贈呈したところ、ケネディー・コイン三個を本会に寄贈された。

(以上)

本部・東京支部連絡会議

▽日時 三月十三日、午後六時三〇分
▽場所 本会ルーム
▽出席者 松方会長、三田副会長、常務理事—加藤、辰沼、大塚、村木、飯野、松田、宮下

東京支部 石原支部長、沼倉委員長、広谷委員、折井監事(以下十三名)
▽議事

松方会長議長となり、本会議招集の趣旨説明があった後、加藤常務理事より、東京支部を解散してはどうかと、次の様な理由説明があった。

(1) 登山条例の施行に伴い、支部のない地域に在住する会員は、日本山岳会という立派な組織に入っており乍ら、日本山岳協会の組織の面からみると、未組織登山者になってしまい、登山許可の届出申請等の中で、問題がある。この不合理をなくするために、東京支部連に東京支部が加盟するのは、東京支部が加盟するのではなく、本会が直接に加盟した方がよいのではないかと。

(2) 東京支部の設立当初は、本会が直接山岳協会に加盟して、団体登山等を運営していたので、本部の他にどうしても必要であったが、山岳協会が一変した今日においては、東京支部の必要性はなくなった。

(3) 本会の運営上、本会の所在地に支部があることは、かえって不便な点が多い。

等の理由により、本会の理事会と、東京支部の委員会は合併することにし、この際東京支部は解散しては如何か。

この提案に対し、種々と東京支部より質問があった後、支部を解散することにより発生する考えられる問題につき、種々検討を行った結果、設立後二十年を経過した東京支部は、その目的を達したので発展的に解散すべきであるということ意見の一致をみたので、東京支部の委員会にはかった後、この線にそって具体的に準備をすすめることを確認した。

東京支部

▽三水会(二月十五日)

昨年夏、アンデスに遠征されたエリデルワイスクラブ隊の報告。

目標のプカランラ(六一四七米)は頂上直下で断念したもの、女性のみ七人で立派な山行をやったこと、とが、映画「女七人アンデスを行く」や数々の話の中に見られ、又、女性だけの隊にまつわる裏話なども興味深いものがあつた。参加者数三十五名。

▽役員会(三月一日水)
出席者 沼倉・野田・鈴木・大西・細井・小味・堀川・武田・広谷・須田・富田(折井・松田・山口)
1 報告事項

(イ) 岳連関係(野田)
都岳連は二月二十二日付で平井会長の辞表を受理した。

谷川岳登山規制に関する群馬県条例は三月一日より実施される。

(ロ) 女子部 ニュージーランド登山隊の帰国の報告(山口)
2 議題

(イ) 来年度役員改選に関する件
本件に關しては三月二十二日(水)臨時役員会を開催する。

(ロ) 三月三水会の件
「ニュージーランドの旅」山口節子氏他の映画と話。

(イ) 技術講習会の件
六月初旬、ウェストン祭に続けて四日間の予定で実施したい。詳細は実行委員会に一任する。委員—広谷・松永・堀川・小味・武田。以上 (松永)



☆ガストン・レビュファの原著

四月の二四日の夜、レビュファと、ブンシャーとマリーニの歓迎会が、いつものOAGで開かれた。

私は例によって三人からそれぞれに關係のある原著に署名してもらったが、レビュファの場合には近藤氏がそばに立っていた。私がフランス語の「雪」と岩」を出す、近藤氏は呆れた顔で、「吉沢さん、それ持っていたのですか、私の訳書と取換えませんか」という。

何故かと聞くと、実は出版社に貸した行方不明になってしまつて持つてないのですよ、とのこと。しかもこれはもう絶版なんだそうだ。

私は近藤氏の訳書も持っているが、こういうことを聞くと益々手離せなくなった。尤も話によつては御相談に応じないこともない、とは言つておいたが、果して皮算用以上のものを出すかどうか。結局は談判決裂で、永久に私の手許に眠ることになるのである。

◇ 日本登山学校 五月、六月の授業 ◇

- 5・13・14 (古賀志山の岩場実技)
- 16 (山の病氣・矢橋)
- 17 (山の怪奇現象)
- 23 (食生活・松永)
- 25 (岩登りの応用技術)
- 27・28 (乾徳山の岩場)
- 30 (文学、音楽)
- 6・1 (岩魚、食用植物)
- 6 (沢登りの技術)
- 8 (雲の観察)
- 10・11 (越後駒他)
- 13 (アフリカの山・内田)
- 15 (ヒマラヤの気象・村井)
- 20 (研究発表・レビュファ・近藤)
- 22 (テスト結果の発表)

大田区調布廣町一ノ四〇
電話(75)四〇四六 川崎隆章

あなたのネガから パネル張り

山岳写真を

ありし日の、苦闘と歓喜をいまここに

35mmからすばらしい迫力！

あなたのネガから、明快なコントラストと適切なトリミングで、大型・美麗・パネル張り写真を製作いたします。ネガと返送料150円同封でご注文下されば到着後1週間前後で製作発送いたします。

代金は着品後10日以内にご送金下されば結構です。

なお代金前払いの方には送料は弊社で負担いたします。

但し、ネガ不調のため作品にご満足頂けないと思われる場合には、ネガ、代金、返送料ともそのまま直ちに返送申上げます。

お気軽にネガを送って下さい

白黒の部

■全紙半分	パネル張り	¥ 1,200
■全紙(新聞1ページ大)	パネル張り	¥ 1,600
■全紙2倍	パネル張り	¥ 4,000

カラーの部(ネガ、カラーに限りです)

■四切	パネル張り	¥ 1,500
■半切	パネル張り	¥ 3,000
■全紙	パネル張り	¥ 5,000

上記以外のサイズ、または同時に多数のご注文の際はご照会下されば、別にお見積申し上げます。



優れた技術とハイセンスの

カタログ進呈

本多写真

本多善博

名古屋市中区熱田局区内柴田西町1-16 TEL (611) 7047

(16頁より) 員が、登山人組織などに眼の色をかせ、自然を忘れ去ったような日常生活を過ごすだけになっては、もはや日本山岳会創設の理念も、會員を引きとめるべき魅力もまったくなくなってしまうであろう。

たとえ好まない奉仕をさせられることがあるとしても、いつまでも自然界の自由人として生きたいという希望を失わない山岳人の良識を消し去らないた

めに、組織・権限にはまったく無関係な集まりが、日本山岳会の中には当然あってもよからう。

山岳会がどれほど事業・指導などをガタガタやろうとも、純真に山を語り合えるアルビニスト・サロンを持たない日本山岳会は、會員に喜ばれない、良識・伝統を持たない集団にすぎないものであらう。

われわれは、失われようとする日本山岳会の伝統と良識とを語り継ぐという、会の一つの面のみのために、一水懇親会という名の時間をつくることにした。

山へ行かないときの山岳人がフアラリと訪れて、居あわせた同族と語りあうだけのものであり、それ以外のものではありえないものである。気が向けば、懇親山行とか、河岸をかえて酒をくみかわすなどの行動をとることは当然である。

この会には性格として、世話人も責任者も座長も一切不要であるが、先般、奥多摩数馬の宿で一夜を共にした面々が中心となり、この時間をつくろうと決めた。

一水懇親会規定

日時 毎月第1水曜日午後5時から9時の間

場所 日本山岳会ルーム

資格 会員であればよい(暫定的世話人氏名次号掲載)

昭和四十二年六月十日発行

東京都渋谷区神宮前

三ノ三二 外苑コーポ内

発行所 法人 日本山岳会

編集代表 吉沢 一郎

頒価五十円 (40)七六五七

振替口座東京四八二九番

印刷所 株式会社 技報堂

◆ ◆ ◆

☆又、地図と山の本の即売展が左記のように開かれる。かなり苦心して集めたようなので、有志の御来臨をお待ちしているという。☆(吉沢)

世界の山岳 地図と本 即売展

期日と場所

・昭和42年5月29日(月)正午より、6月3日(土)午後5時まで(日本橋丸善)
・昭和42年6月5日(月)より、6月10日(土)まで
(名古屋丸善)

出品内容

・地図Ⅱアルプス山系のモンブラン、マッターホルン、ユングフラウ、アイガーなど。中央アジアのヒマラヤ、カラコルム、ヒンズー、タシメ、パミール、天山、崑崙等。コーカサス山脈。アフリカのキリマンジャロ、ケニヤ、ルウェンゾリ。アンデス山脈。北米のマッキンレー、ホイットニー、シユビッツベルゲン、南極、アイスランド、N・Zのクックもの一万より各種、全部で三〇〇種、五〇〇〇枚出品。

・本Ⅱウィンバーのアルプス、アンデスの文庫、エベレスト、アンナプルナ、ブロード・ピーク等の初登頂記を含め、山岳関係文庫、写真集、山岳図ガイド・ブック、約二〇〇点、七〇〇冊を陳列する。

錠(いかり) 康夫君

大山北壁にて遭難

昨年度、本会学生部の副委員長をしていた錠康夫君が四月二十九日伯耆大山の北壁を単独登攀中、岩崩れに巻き込まれて遭難死した。

昨年、お手紙に届いた会報の中には、錠君が、のりをつけたたり、折り込んでくれたものも随分とある筈だ。余り目立ったところはなかったが、地味で温厚な好青年だった。

会報の発送は仲々面倒な仕事であるが、電話一本で呼びつけられて黙々と手伝ってくれた錠君の姿が、いまでも残っている。

錠君は、母一人子一人の家庭であった。今春、上智大学法学部を卒業し、大阪の寺内株式会社就職したばかりである。就職後、最初の山登りが、大山の北壁であった。

罹難は五月五日、東京の神田寺で行われたが、学生部の友人たちが多数参列し、故人の冥福を祈った。(小方)

★山の第一頁レイアウトについて会員の皆さんからいろいろ御意見が届いた。それによると、二六二号が二六一号よりやや多いという結果になる。

★本号ではもう一度山の字を大きくし、JACを下におろしてみた。これで種が尽きたようなので、近いうちにどれかに決めてもらいたいと思う。お世話をかけました。(吉沢一郎)

昭和四十二年五月十日発行
東京都渋谷区神宮前
三ノ三二 外苑コーポ内
発行所 法人 日本山岳会
編集代表 吉沢一郎
頒価五十円 (40)七六五七
東京都港区赤坂一丁目三番六号
振替口座東京四八二九番
印刷所 株式会社 技報堂

☆会報製本御引受け☆

製本代 (201号~250号) 金 600円也
送料 別受け 金 120円也

中林製本手帳株式会社

東京店・文京区水道端2~15、電話(943)0311(代表)
大阪店・都島区相生町7、電話(352)3491(代表)
名古屋店・昭和区雪見町1~15、電話(731)7331(代表)
工場:大阪工場(堺市)、東京工場(戸田町)

▶背文字その他については往復はがきで
日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀

山岳保険に入りましょう!!

- 貯蓄にもなります。
- 万一の場合にはひとの迷惑を軽減します。

御相談は **日本団体生命** へ

角筈支部(専門取扱営業所)
東京都新宿区角筈1の844 新光ビル内
電話(352)1556・1557

あなたのネガから、大型パネル(枠)張り

お部屋の飾りに! 贈りものに!

山岳写真を

(本多善博)

本多写真工房

名古屋市南区柴田西町1-16 電話(611)7047

あなたのネガから、明快なコントラスト適切なトリミング(構図)で、大型・美麗・パネル張り写真を製作いたします。
ネガと返送料150円同封でご注文下されば到着後5日以内に製作発送いたします。
代金は着品後10日以内にご注文下されば結構です。なお代金前払いの方は返送料は弊社で負担いたします。また、特にトリミングをご希望の方はその旨明示して下さい。
但しネガ不調のため作品にご満足頂けないと思われる場合には、ネガ、代金、返送料ともそのまま直ちに返送申し上げます。

■全紙半切	パネル張り	¥1,000
■全紙	"	¥1,500
■(新聞1ページ大)	"	¥1,500
■全紙2倍	"	¥4,000

上記以外のサイズ、または同時に多数ご注文の際は、ご照会下されば別にお見積り申し上げます。